

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：33910

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24660064

研究課題名(和文) 学生同居(近住)型高齢者介護支援に関するパイロット調査

研究課題名(英文) A pilot study on care support program for elderly people by students with living together or near the elderly home.

研究代表者

城 憲秀 (TACHI, Norihide)

中部大学・生命健康科学部・教授

研究者番号：10137119

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：介護支援戦力として大学生の活用を探るため、学生と高齢者の両者が考える交流や生活支援への意向を質問紙調査で明らかにしようとした。6割の学生が高齢者との交流・生活支援活動への参加意思を示したが、高齢者では学生に比べ参加意思が低かった。交流・生活支援への参加方法をみると、学生は「自宅から」通いながら、「月に2回程度」(64.7%)、1回の参加時間は2～3時間未満と回答した者が多数を占めていた。高齢者では、「必要な時に」来てもらい、「ちょっとした力仕事」など日常生活の簡単な支援をしてもらいたいという意見が多かった。学生による高齢者支援を図るためには十分に練った慎重な計画が必要であると思われる。

研究成果の概要(英文)：It is considered possible to apply college students to support the daily living in elderly people as a manpower. We thus conducted questionnaire surveys concerning the differences in intentions between students and elderly people to participate in the exchange or daily life support program. As a result, 60% of students have an interest in joining the program, while elderly showed less interests. Many students hoped to participate the program with commuting to elderly from their home, around twice monthly, for 2-3 hours/each time, whilst considerable number of elderly people wanted students to come when necessary to help some light physical work. Since the intention of exchange program was different in elderly people from college students, it is necessary to build up the care support program with careful and discreet plans.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：介護支援 学生 高齢者 同居・近住 意向調査

1. 研究開始当初の背景

わが国は超高齢社会を迎え、在宅医療・看護・介護の充実が焦眉の急となっている。一方で、核家族化の進行は、高齢者夫婦あるいは高齢者のみの独居という居住形態を増加させている。また、在宅での介護でも、いわゆる老老介護や介護者の不在という事態を引き起こし、在宅医療等を充実するための人的資源の不足という困難な状況が生じてきている。

そのような介護者が不足している要介護高齢者に対して、大学生が高齢者と同居あるいは近住することにより、日常的な世話や会話の相手となることで、要介護高齢者の介護の充実を図ることができるのではないかと考えた。高齢者との同居や近住は、昨今の厳しい社会経済的情勢の中で大学生の生活費のカットにもつながり、双方にとって有益な部分も多々あると思われる。良い条件下においては、要介護高齢者と学生双方にとって同居(近住)は、介護人材の確保ができるとともに、在宅医療レベルの向上にもつながることが予想される。

2. 研究の目的

本研究では、当初、初年度において、要介護高齢者に対するボランティアとしての学生介護のための同居や近住について、高齢者および大学生双方のニーズについて質問紙調査を行ない、次年度に本格的な運用を狙ったパイロット的同居(近住)を実践し、在宅介護・看護上の効果や高齢者・学生双方の満足度などについて評価を行なうことを予定した。しかしながら、質問紙調査の結果から、単純な学生のお同居(近住)による介護活動が、双方に種々のリスクを生じる可能性が示唆されたことから、同居(近住)についてのパイロット事業はいったん断念し、現時点で実行可能な学生による高齢者介護のあり方を探ることを検討した。

3. 研究の方法

目的にも記したが、研究を遂行した結果、今回の研究では質問紙調査がメインとなったので、これを中心に記載する。

学生の意向に関する質問紙調査

質問紙調査の対象学生は、本学の生命健康科学部に在籍する1~4年生を対象とした。調査は、本学学生に対しては、2012年9月に学生が集まる機会を利用して、研究主旨の説明を行い、その場で質問紙への回答ならびに回収を行った。質問紙への回答は無記名とし、内容は、(1)高齢者との交流・生活支援への関心やその活動への参加の有無、参加方法(同居・近住)、(2)学生ができる高齢者への交流・生活支援内容、(3)高齢者への交流・生活支援に向けて必要な知識、その他、学生の背景として、性別、年齢、学年、高齢者との同居経験の有無について尋ねた。

高齢者に対する質問紙調査

高齢者の調査では、愛知県K市の老人クラブに所属する65歳以上の高齢者および介護予防事業参加者を対象とした。調査は、K市役所を通じて、老人クラブや地域自治体の代表者の方を紹介して頂き、これらの方々に2012年12月ごろに質問紙の配付をお願いした。質問紙は2013年3月までに郵送法により回収した。介護予防事業の参加者からの回収は、代表者の方に回収をしてもらい、その後研究者が代表者の方の所に受け取りに行った。高齢者への質問紙も無記名で回答してもらい、内容は、(1)日常生活で困っていること、相談相手、(2)健康状態、罹患している病気、(3)大学生に希望する交流・生活支援とその参加方法、活用希望の有無、(4)身体機能、その他、年齢、お住まいの地区、同居されている家族、住居形態に関する項目から構成した。

分析方法

IBM SPSS Statistics Windows ver.20を用いて統計処理を行った。記述回答は、項目ごとに内容をまとめた。

4. 研究成果

(1)対象者の概要

回答者数は、大学生1,198名(回収率96%)、高齢者987名(回収率67%)、高齢者の平均年齢 72.3 ± 0.6 歳、回答者の性比は大学生、高齢者ともほぼ1対1であった。高齢者の回答から、日常生活で困っていることは、「全くない・あまりない」が75.8%となった。

(2)交流・生活支援に対する意識

高齢者では、大学生との交流・生活支援の利用希望は、「あまりしたくない」、「したくない」が約半数を占めた。大学生では、「すごくしたい・ややしたい」が60%であった。

(3)交流・生活支援の参加方法

大学生が参加可能な交流・生活支援方法については、「自宅から通う」が85%で一番多く、近住が11.4%、同居3.7%であった。次に、参加可能な頻度は、「月に2回程度」(64.7%)で多く、「週に1日」(27.2%)の順であった。1回の参加時間では、「1回2時間未満」が337名(46.1%)で多く、「1回3時間未満」238名(32.6%)の順であり、2~3時間未満と回答した者が8割を占めていた。

高齢者の希望する大学生との交流・生活支援の参加方法については、「自宅に必要な時に大学生に来てもらい利用する」265名(36.3%)で多く、次に「近くに大学生に住んでもらい必要な時に利用する」(20.1%)で、「大学生と同居してもらい必要な時に利用する」(12.7%)と少なかった。

(4)高齢者・大学生双方が可能な生活支援

高齢者が大学生に望む支援は、「ちょっと

した力仕事」(18.4%)、「安否確認」(10.6%)、「簡単な手助け」(9.3%)の順で多かった。反対に大学生が可能と考える高齢者への生活支援は、「話し相手」(20.3%)「ちょっとした力仕事」(16.4%)、「安否確認」(14.7%)の順であった。高齢者の「大学生との交流・生活支援に対する意見」についての自由記述では、現在は元気なので交流・生活支援を考えていないといった事柄や大学生との対応の方法に悩む内容の記述がみられた。

(5) 研究結果に基づく考察

大学生・高齢者との交流・生活支援活動への参加意識

高齢者においては、大学生との交流・生活支援の利用希望は、どちらともいいかねるものであった。反対に大学生では、「すごくしたい・ややしたい」(60.3%)となり、高齢者との交流・生活支援の参加意識が高かった。高齢者の利用希望が低くなった要因は、今回対象となった高齢者の健康状態が良く、日常生活での困りごとが少なかったことや、年代の異なる大学生との対応に困惑を感じるなどなどが推察される。先行研究や村山らの研究においても、世代間交流事業の課題には、(1)世代間ギャップ、(2)運営の問題、(3)交流プログラムの問題、(4)参加者確保の問題などが明らかにされていた。この先行研究結果と同様な傾向が今回対象となった高齢者の記載からも読み取れた。このような高齢者の心理と重なり、高齢者の参加方法も「自宅に必要な時に来てもらいたい」が多く、年代の違う大学生との一定の距離を図りながらの交流を考えている表れと推察できる。今後、世代間交流を円滑に進めていくためには、両者の架け橋となるスタッフの人材配置と両者が相互に取り組める内容を構築していくことも求められると考える。さらに、今回は健康な高齢者であったため大学生との交流・生活支援の利用希望が少なかったが、健康に不安を抱いている要介護高齢者では、大学生との交流・生活支援の利用を希望している高齢者がいると考えられるため、今後継続して調査していきたい。一方、大学生では高齢者との交流・生活支援参加意識が高かった。今回、対象となった大学生は、医療系の学部の学生が多く、将来高齢者との関わりのある職種に就くことから、学生時代から交流をすることで、自分自身の学習に役立てたいと考えている学生が多かったのではないかと考える。

高齢者が希望する支援と大学生が可能と考える生活支援

高齢者が大学生に望む支援は、「ちょっとした力仕事」、「安否確認」、「簡単な手助け」が多く、大学生が可能と考える支援は、「話し相手」、「ちょっとした力仕事」、「安否確認」であった。この結果から両者の違いをみると、大学生は「話し相手」が高齢者への支援として一番できると考えていたが、高齢者は希望

が少なかった。大学生が、「話し相手」を一番可能な支援と捉えたのは、医療系の学生では基本的な高齢者とのコミュニケーションについて学習しているため可能と判断したと予測できる。また、内閣府(2003)の高齢者のイメージの調査では、「心身がおとろえ、健康面での不安が大きい」が7割を超え最も高く、以下「経験や知恵が豊かである」、「収入が少なく、経済的な不安が大きい」、「時間にしばられず、好きなことに取り組める」、「古い考え方にとらわれがちである」、「周りの人とのふれあいが少なく、孤独である」、「健康的な生活習慣を実践している」等の順となっていた。この結果にみもみられた「周りの人とのふれあいが少なく、孤独である」を高齢者のイメージを抱いている人が多く、今回の大学生もその問題を解消するために、「話し相手」の支援が上位になったと考えられる。しかし、高齢者では「話し相手」を希望する割合が低かった。渡邊ら(2010)らの研究では、若者のイメージについて75歳以上では75歳未満に比べて、「話しにくい」、「何を考えているのかわからない」と回答していた。その一方で若者との交流への期待度は高かったという結果が報告されていた。この研究結果と同様に、高齢者が世代の違う大学生との関わりに戸惑っていることが高齢者で「話し相手」を希望する割合が低くなった要因の一つと考えられる。また、高齢者が若者との交流の期待高いことも示されていたことから、今回対象となった健康な高齢者の場合では、生活支援だけではなく、双方にとってメリットのある内容を加味した世代間交流を検討していくことが必要であったと考える。

(6) 研究結果から得られた結論

高齢者の大学生との交流・生活支援の利用希望は、「ややしたい」が3割程度で低く、大学生では6割に参加意思がみられた。

交流・生活支援の参加方法は、高齢者は自宅に必要な時に来てもらいたいと考えている割合が高く、大学生では自宅から参加するが多かった。

高齢者が大学生に望む支援は、「ちょっとした力仕事」、「安否確認」(10.6%)、「電球の交換や高い所の物をとる手助け」多く、大学生では「話し相手」、「ちょっとした力仕事」、「安否確認」であった。

したがって、調査結果から学生による高齢者介護のあり方を考えると、学生・高齢者双方とも同居あるいは近住によるケアのような濃厚な関係性については否定的な姿勢がうかがわれた。学生が高齢者ケアに携わるためには、両者の意識が変革されないと困難であるものと想像される。このような意識を変化させるためには、日常的に学生と高齢者が触れ合う機会を増加させ、さらに、そういった機会をとらえて、学生によるサービスを提供できる活動を進めることが肝要であると

思われた。その上で初めて同居、近住スタイルの高齢者介護ができるように考察される。

本学は、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」の1大学として認可され、今後、大学としても地域貢献に向けたCOC(Center of community)事業として発展させていくことになっている。報告者らは、この事業の中で、本研究結果が活かされる形で活動が進められることを祈念している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

福田峰子、加藤智香子、梅田奈歩、藤丸郁代、大島圭恵、城 憲秀、大学生・高齢者間の交流・生活支援に対する意識調査、中部大学生命健康科学部紀要、査読有、2014、10、印刷中

福田峰子、加藤智香子、藤丸郁代、梅田奈歩、大島圭恵、城 憲秀、大学生同居(近住)型による高齢者との交流・生活支援に対する意識調査 - 本学学生のアンケート結果から -、中部大学生命健康科学部紀要、査読有、2013、9、75-83

[学会発表](計1件)

福田峰子、加藤智香子、藤丸郁代、梅田奈歩、城 憲秀、大学生・高齢者間の交流・生活支援に対する意識調査、第72回日本公衆衛生学会総会(三重県総合文化センター、津市)、2013年10月24日

6. 研究組織

(1)研究代表者

城 憲秀 (TACHI, Norihide)

中部大学・生命健康科学部・教授

研究者番号：10137119

(2)研究分担者

福田 峰子 (FUKUTA, Mineko)

中部大学・生命健康科学部・准教授

研究者番号：00238487

藤丸 郁代 (FUJIMARU, Ikuyo)

中部大学・生命健康科学部・講師

研究者番号：30513361

加藤 智香子 (KATO, Chikako)

中部大学・生命健康科学部・准教授

研究者番号：60335057

梅田 奈歩 (UMEDA, Nao)

中部大学・生命健康科学部・助教

研究者番号：50582524

大島 圭恵 (OSHIMA, Yoshie)

中部大学・看護実習センター・助手